

中経 論壇

経営支援NPOクラブ理事
山本章博



えないから、せいせい、「オッケー、サンキュー」である。米国では子供時代から、相手を褒める教育がなされているのだと感心した。

私は2年間米国に滞在した。小学生に対する調査で「あの街の散髪屋での経験が忘れられない。私の隣で、小学1年生くらいの少年が髪を刈ってもらっていたのだが、理髪師が鏡で仕上がりを示しながら、終了のサインを送った時、少年から「ビューティフル」という言葉が飛び出してきた。それは、散髪屋さんの仕事に対する賛辞だったのだ。私などは、散髪終了後の自分の姿にビューティフルというような表現は恥ずかしくて使

日本の教育 アメリカの教育

本的には誰もが何かと意思。の得意科目を持って。アメリカでは、褒める文化いるから、自分は優と長所を伸ばす教育システムを持っているという自信が、モノづくりにおいても、クを持つことになる。また、高校生が大学の授業を受けるなど、青少年たちが、能力に合わせた、高度なレベルの知識と経験を積むことができるシステムになっている。

一方、日本では、長所を褒めるよりも短所を指摘して、是正するよう指導することが多い。その結果、学校でも家庭でも「それをしてはいけない」と言われることが多いような気がする。会社においても、弱点を直すことが第一になっ

今後、日本のモノづくりが生き残っていくためには、新製品を生み出す力が必要である。そのためには、個人の得意な点を見つけ、大胆に伸ばしていくという発想の転換が求められる。学校だけでなく、家庭や企業でも画一的・横並びの教育システム、人事システムを見直し、アメリカの褒める文化と長所を伸ばす教育システムを参考に、活力ある人材養成システムを構築する時である。

褒めて得意技を伸ばす